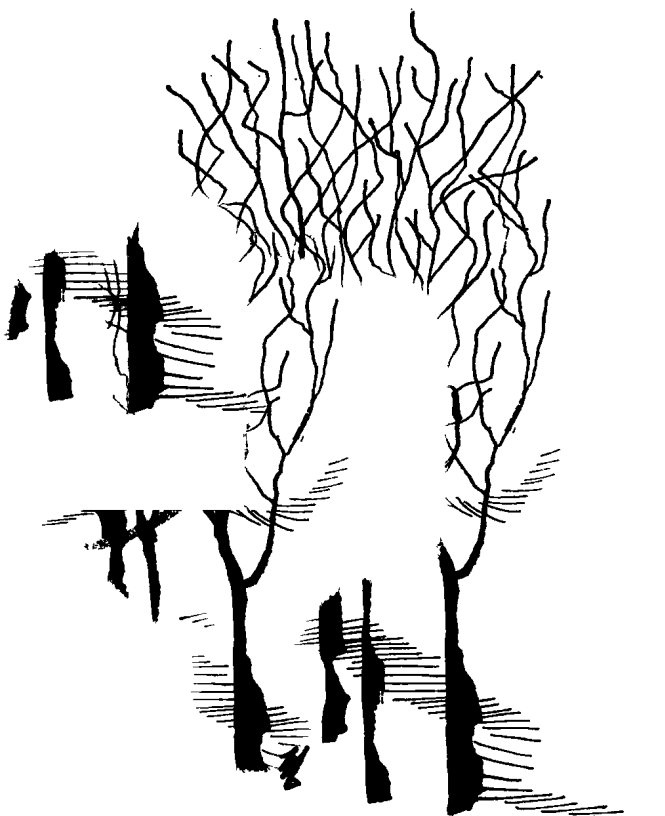
POPULAR BOOKS



桃源社・刊

昭和37年8月1日　発行

鎮魂の森

著作者　樹下太郎
発行者　矢貴東司
印刷者　小泉輝章

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蛎殻町1—12
電話（671）4001～2番
振替東京 64351 番

¥ 250.

落丁・乱丁の節はお取替え致します。　1962 ©

目次

一　36年12月11日……五
二　遺　書……三六
三　36年12月12日……九一
四　36年12月13日……一六五
五　36年12月14日……二〇五
六　37年3月21日……三三六

装幀　三井永一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

鎮魂の森

一　36年12月11日

1

二見貴一郎は大正十年一月十一日生れ、まもなく満四十一歳になろうとしている男である。

体重五十四キロ、身長一・七二メートル。

やや痩せ気味ながら、病気らしい病気をしたことがない。

ただ数年前から性的不能者ではないかという噂が立っていた。いまでは噂は既に固定して、むしろ伝説に近くなりつつある。両親にそのことを問いただされたときにも、かれは否定も肯定もしなかったという。

いまだに独身で、おそらくこれからも結婚せずに通すのではないかとひとびとに思われていた。

貴一郎は二見食品株式会社社長の長男であった。が、社の内外のひと達が「若社長」とよぶのは、かれではなく、かれの弟、次男の修二郎のことであった。

貴一郎は部長待遇の「調査室長」に過ぎない。

事務所の二階の一室に「調査室」が設けられたのは今年の六月、半年ばかり前のことである。「調査室」はほとんど仕事らしい仕事をしていなかった。それでよかった。かたくなに独身を守ろうとする姿勢が、いつのまにか貴一郎に人嫌いな性格を植えつけ、実務には不向きな存在になってしまい、「調査室」はいわばそんなかれのために父親が設けた機関だったからである。

調査室が発足すると同時に、貴一郎に河口冴子というアシスタントがつけられた。肉づきのいい二十六歳の女性である。

五坪程の部屋の中で毎日を二人だけで過してきているのだった。

転属を命ぜられたとき、冴子は至極憂鬱であった。他の大多数の社員たちと同様、貴一郎に不気味さを感じていたからである。

「新らしい仕事になじめないようだったら、いつでも遠慮なく言ってくれないか。いいね、遠慮しちゃいけないよ」

冴子が挨拶すると、貴一郎はいきなりそう言った。意外に明るい口調なのに冴子は驚いた。微

笑もなんとなくあたたかい感じで、案外気楽に勤められそうな気になった。
一週間程経って、貴一郎が決して、人が噂する程の変人ではないことを知った。
秋になると二人の間には親しみが生れ、たまには世間話を交すようになった。
「ぼくがこんな場所へ閉じこもってしまったので、下の連中はさぞぼくを徹底した人嫌いだと思っていることだろうね」
下の連中というのは、階下の事務室に働いている社員たちのことである。
いきなりそう話しかけられたとき、冴子は返答に窮した。
貴一郎はひとり言のように言葉をつづけて、
「どう噂されようと別に気にはしてないが、ぼくは人嫌いというわけじゃないんだ」
「でも、ひととお会いになるのは、あまりお好きじゃないんでしょ？」
「本当は好きなのさ。ただみんなきまったようにぼくの顔を見ると結婚の話を持出したがるんで、それでだんだん嫌になったんだ。しまいには、ぼくの方で、誰を見ても結婚の話をしようとするんじゃないかって気がしてね」
「――結婚ノイローゼ？」
「まあ、そうだ」

苦笑をうかべるのである。
少し沈黙。
やがて冴子は思いきって訊いてみた。
「どうして結婚なさらないんですか」
「きみはぼくの噂を知らないのか？」
「はあ？」
「ほんとは知ってんだろう？」
知らないとは言えなかった。冴子は既に頬を火照らせてしまっているのだ。
二年前に処女をなくしていた。そのときを含めて三回、男のからだに接した経験があるだけに、羞恥に厚みがあった。
冴子は、やりかけている仕事に戻った。
調査室勤務になって彼女に与えられている主な仕事はファイリングであった。
仕事らしい仕事ではないにしても、調査室にはそれなりの仕事が与えられていた。各課から提出されたさまざまなデータをもとにして、会社全体の業績をパノラミックに摑み、検討するということになっているのだ。貴一郎の役割はそれらにひと通り眼を通してファイル区分をチェック

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

し、冴子はその区分に従ってファイルに綴じ込むのである。
余った時間が出来ると、冴子は宣伝課から仕事を貰ってきて手伝うことにしていた。なにか仕事をしている方が時間が早く経ってくれるからである。使用者のアンケートの整理集計が、宣伝課から頼まれる主な仕事であった。
アンケートを一枚一枚丹念に眼を通しながら、
「でも、あたし、部長さんのそんなお噂信じていませんわ」
「ほう、どうしてだね?」
「部長さんはときどきもの思いに耽っていらっしゃることがありますわ」
部長待遇なので、貴一郎は社内では部長とよばれているのである。
「それで?」
「そのときの横顔が——なんといったらいいのか、ひどく人間的な感じなんです」
「つまり、きみの主観だね」
「ええ……」
冴子は実は「人間的」ではなく「人間くさい」と言いたかったのだ。少くとも内に欲望を秘めていることだけはたしかであろう。ぴっちりフィットしたスラックスを穿いて出社した日の、貴

一郎の彼女への視線がひどく眩しそうだったことも、彼女の記憶の中にはあった。
漠然とではあるが、貴一郎の結婚しない理由はほかにある、と、冴子は考えている。
そしてそれを暗示するような——もしくは示唆するような出来事が十二月にはいって起ったのだった。

2

事務所の二階は会議室と応接室になっていた。調査室は突当り南端にある五坪程の応接室を改造したものだ。
陽当りがよかった。
十二月にはいっても、だから、日中はストーブがいらなかった。
気温も冬らしくなく暖かかったのだ。
「東京は冬寒くなることを忘れちまったみたいだね」
貴一郎が言ったが、冴子もそう思う。しかも此処は、都心より平均二度は気温の低い東京都の涯てなのである。

「消してもいいかい」
というのが、暦が冬にはいってからの、貴一郎の朝の挨拶になっていた。
かれの出勤は四季を通じて大体十時前後で、その頃にはもう部屋の中には日光がいっぱいにさしこんでいるからである。
十二月十一日、月曜日の朝も、貴一郎はいつものようにして部屋へはいってきた。むしろ、平生よりは晴れやかな顔つきであった。前週の土曜日、九日にボーナスが支給されていて、かれの場合も冴子と同じように一応満ち足りた休日を過したからなのだろうか。
「お早ようございます。いいえ、あたしが消しますわ」
と、冴子は答え、ガスストーブの前に中腰に屈みこんで栓をとめる。
冴子はその姿勢をなるべくなら貴一郎に見られたくなかった。彼女の腰は大きなまるみと弾力とをもっていて、中年の社員からそれをあからさまに冷かされたことがあったくらいだからである。
調査室には電話もあまりかかってくることもなかった。
工場の騒音がわずかに響いてくる中で、仕事が捗ってゆく。
午後二時頃になって、貴一郎に電話がかかってきた。

「高橋さんとおっしゃる方からですけど」
冴子が送話口を掌で掩ってから取次ぐと、
「どこの高橋さんだい？」
「それが、ただ高橋としかおっしゃらないんだそうです」
「よし、出よう」
貴一郎は送受器をつかんだ。
電話はながかった。
貴一郎には高橋と名乗る相手には記憶がないらしい。
やがて、
「さきにあなたがどんな方か教えていただきたいですな」
声を荒げた。かれのそんな声をきくのははじめてであったから、冴子はとびあがる程驚いてしまった。
「見ず知らずのひとと昔話をする趣味はぼくにはないのだ」
怒りをたたきつけるといった調子である。
貴一郎の顔はドーランを塗ったかのように蒼ざめて見えた。

かといって、そのまま電話をきりもしないのだ。
冴子は席をはずした。ドアの外で息を殺し、耳をそばだてた。自分からドアの外へ出たのだから、盗み聴きしているという後めたさは感じなかった。
——いったい、きみはなにを言おうとしているんだ！
——ばかな！
——とんでもない言いがかりだ。
貴一郎の声からは次第に怒りが消え失せ、苦しみがそれにとって代った。
——いい加減なことを言うもんじゃない……
冴子が聴いていられない程悲痛な語調である。
相手が貴一郎には不利ななにごとかを喋り、かれが必死に否定しようとしていることだけは確かであった。
が、高橋と名乗る男は執拗に攻撃をゆるめようとはしないらしい。
——やめてくれ。
——それより、きみはどうしてその手紙を？
……やがて貴一郎は屈伏させられてしまったらしく弱々しく絶望的な声を放った。「認めよう

……」

最早、貴一郎の敗北は明らかというべきだろう。

電話はそのあとも尙しばらくつづいたが、

——脅迫か。

——お話しはよく分りました。

——十二月三十一日までというわけか。

という貴一郎のせりふだけは、冴子の記憶の中に残されている。

三十分近い通話ののち、やっと電話はきられた。

冴子は足音をしのばせて、階下の湯沸場へいった。

湯沸場には誰もいなかった。

湯が沸くのを待ちながら、冴子は貴一郎がおそらく立たされているにちがいない苦境を思いやった。

自分が力になれたら、とすら考えるのだ。

二見貴一郎は、彼女の知る限りに於て温厚な人物であった。多少人嫌いな点はあるにしても、噂されている程変人ではないし、不能者という伝説も彼女にはのみ込めない。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo